

2024年度

大学院文学研究科博士課程後期3年の課程入学試験

(冬期・一般選抜) 問題

筆記試験 東洋史 専攻分野

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

成	
績	

2024年度

大学院文学研究科博士課程後期3年の課程入学試験

(冬期・一般選抜) 問題

筆記試験 (東洋史 専攻分野)

I 以下の中国古典文 (A) (B) につき、(1) 貸与された赤鉛筆を用いて句読(。、)を切り、(2) 現代日本語に訳せ (赤鉛筆は句読を切るときのみ使用)。

(A)

左史記言右史記事歷代皆重其職唐太宗嘗欲
觀起居注朱子奢曰恐開後世史官之禍史官全
身畏死悠悠千載尙有聞乎子奢後至文宗益重其
事每入閣日左右史執筆立于螭頭之下宰相奏
事得以備錄宰臣既退上召左右史更質證所奏
是非故開成政事最詳續文帝嘗與宰相議事適見
鄭朗執筆螭頭下謂曰向所論事亦記之乎朕將
觀之朗引朱子奢事對曰史不隱善謹惡人主或
飾非護失見之則史官無以自免卽不敢直筆昔
褚遂良亦稱史記天子言動雖非法必書庶幾自
飭也帝曰朗可謂善守職者朕恐平日之言不合
廿二史劄記 卷十九 五 中華書局聚
珍館宋版
治體庶一見得以改之耳朗乃上之朗傳後帝又欲
觀魏謩起居注謩曰陛下但爲善事勿畏臣不書
帝曰我嘗取觀之謩曰此史官失職也陛下若一
見之自此執筆者須有迴避後世何以示信乎乃
止論者咎朗而直謩謩傳

(趙翼『廿二史劄記』卷十九「天子不觀起居注」より)

受験記号番号

2/5

(B)

贖刑本虞書呂刑有大辟之贖後世皆重言之至宋時

尤慎贖罪非八議者不得與明律頗嚴凡朝廷有所矜

恤限於律而不得伸者一寓之於贖例所以濟法之太

重也又國家得時藉其入以佐緩急而實邊足儲振荒

官府頒給諸大費往往取給於贖二者故贖法比歷

代特詳凡贖法有二有律得收贖者有例得納贖者律

贖無敢損益而納贖之例則因時權宜先後互異其端

實開於太祖云律凡文武官以公事犯笞罪者官照等

收贖錢吏每季類決之各還職役不附過杖以上記所

欽定四庫全書

犯罪名每歲類送吏兵二部候九年滿考通記所犯次

數黜陟之吏典亦備銓選降敘至於私罪其文官及吏

典犯笞四十以下者附過還職而不贖笞五十者調用

軍官杖以上皆的決文官及吏杖罪並罷職不敘至嚴

也然自洪武中年已三下令准贖及雜犯以下死罪矣

三十年命部院議定贖罪事例凡內外官吏犯笞杖者

記過徒流遠徙者俸贖之三犯罪之如律自是律與例

互有異同及頒行大明律御製序雜犯死罪徒流遠徙

等刑悉視今定贖罪條例科斷於是例遂輔律而行

(『明史』卷九十三 刑法志一より)

受験記号番号

4/5

Ⅱ 後期三年の課程における専攻計画を述べて。